

第1回「京都駅東南部エリア活性化方針策定委員会」

日時 平成28年7月1日（金）9：45～11：45

場所 キャンパスプラザ京都第一会議室

委員

京都大学大学院 工学研究科 助教 大庭哲治委員

龍谷大学 社会学部 地域福祉学科 教授 長上深雪委員

京都市立芸術大学 美術学部／大学院美術研究科 教授 加須屋明子委員

同志社大学 経済学部・経済学研究科 教授 河島伸子委員

京都商工会議所 地域開発・都市整備委員会 委員（大阪ガス株式会社 京滋地区総支配人） 小西池透委員

市民公募委員 西村睦委員

山王自治連合会 会長 藤岡正男委員

配布資料

資料1 京都駅東南部エリア活性化方針策定委員会 委員名簿

資料2 京都駅東南部エリア活性化方針策定委員会規則 及び
京都市執行機関の附属機関の設置に関する条例（抄）

資料3 対象エリアについて

資料4 対象エリアの現状について

資料5 京都駅東南部エリア活性化に向けた議論の視点

資料6 京都駅東南部エリア活性化方針のイメージ

資料7 京都駅東南部エリア活性化方針策定に係る今後のスケジュール

1 門川市長あいさつ

おはようございます。京都駅東南部に位置する東九条地区を中心とするエリアの活性化方針を議論いただく委員会が、今日立ち上がります。大変無理をお願いして委員に御就任いただきましたけれども、快く御就任いただきましたことに、まずもって心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

京都は千年を超える都でありました。輝かしい歴史、伝統を有しております。同時にその時代時代の制約のなかに、もちろん様々な課題も抱えてきた、これが歴史都市の特色であろうかと思えます。そして地域の皆さん、多くの市民の皆さん、そして先人たちの、また行政の努力も相まって、様々な課題が大きく前進してきた、解決してきた歴史でもあろうかと思えます。京都駅の東南部の地域を視察された方が、「きれいな鴨川ですね、非常に駅から近くて素晴らしい地域ですね、輝かしい歴史があり、ポテンシャルが高いですね」とおっしゃっていただけることは、本当に地域の皆さん、多くの先人の皆さんの並々ならぬ御尽力の結果と、感謝の気持ちでいっぱいであります。

そして文化庁が京都に全面的に移転するという方針が決定されました。文化というのは、衣食住、地域社会、自然との共生、そして多文化の共生、その背景に宗教的な情操等、様々なものが融合して未来を展望していくというものであろうかと思えます。また、そうしたものでなければならぬ。そんな時に京都

駅東部エリアの中心となる、崇仁地域に日本で最初にできた京都市立芸術大学が移転します。川を越えますと、京都美術工芸大学が移転する、その工事が始まっております。少し行きますと、京都国立博物館があり、また素晴らしい伝統産業、伝統文化の地域が形成されております。さらに、7年後の崇仁地域への京都芸大の全面移転、そして今注目される東南部エリアが大きく発展することによって、京都はもとより、関西の、日本の活性化に、また文化・芸術を中心に、日本を元気にし、世界から尊敬される日本をつくっていくために大きく寄与すると確信しております。

改めて、今日まで御尽力いただいた関係者の皆さんに御礼申し上げ、この委員会のなかで、力強い未来を展望する御意見をまとめていただければありがたいと思います。スピード感をもって、私どもは地域の皆さん、委員の皆さんと一丸となって取り組んでまいりたいと思っております。改めて委員の皆さんに御礼申し上げて、意を尽くせませんが、冒頭の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

2 委員長選出

「長上教授は地域福祉学を御専門とされ、京都市地域コミュニティ活性化推進審議会の副会長も務めた御経験がおありと伺っております。京都駅東南部エリアの活性化について審議する当委員会の委員長に最も適した方ではないかと思っております。」との河島委員の推薦により、長上委員が委員長に就任することで全員が合意。

3. 諮問

諮問書の読み上げの後、市長コメント

5年前、10年前には、崇仁地域に、日本で最初に創設された京都芸大が移転するということは、あまり想定されなかったと思います。それが地域の皆さんに、また芸術大学関係者、公務員も含めまして、あるいは多くの市民の皆さんに歓迎されて、移転がスムーズに進もうとしています。そうした時にこの東九条地区や下京区、東山区、南区、ひいては京都全体が変わっていくと確信しておりますので、大胆な発想での御意見をたまわればと考えております。どうぞよろしく申し上げます。

4. 委員長あいさつ

改めまして、龍谷大学の長上でございます。委員長は大役ですが、皆さんに助けをいただきながら進めたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

私は学生の頃、東九条で何年間か過ごしており、たくさんの方々に支えられて、無事に過ごさせていただきました。非常に感謝をいたしております。そういう御縁もありまして、今回お話をいただきました時に、御恩返しと申しますと大げさですが、少しでもお返しできるものならという思いで受けさせていただきました。

私が過ごした時期は40年も前ですので、ずいぶんまちは変わっておりまして、高齢の方も多うございますし、前のように若者が行きかう姿も見られなくなって寂しいなと思っておりますが、なんとか将来像をここで導き出せたらと思っております。

まちづくりは何よりも住んでらっしゃる方がどのようにまちを考えていらっしゃるのか、「このまちに住んでよかったな。」と言ってもらえるのが一番だと思っております。そういうことを大事にしながら、先ほどの市長からのお言葉にもありましたように、全体として活性化するには何が必要なのか、という点

について、忌憚のない御意見をいただければと思います。幸いにも今回は各御専門分野の方で優れた見識をお持ちの方ばかりですので、いろんな意見を賜りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

5 委員長職務代理者指名

長上委員長が、委員長職務代理者に河島伸子委員を指名。

6 協議内容

①対象エリアと現状について

資料3・4の説明ののち、意見交換

小西池委員：

私は4月から大阪ガスの京都と滋賀を担当する支配人をしておりまして、専門家ではありませんが、民間の視点として、また地域に密着する企業として、何らかのお役に立てればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

御説明いただいた内容について、3点ほど思うところがあります。1つ目として、一般論かもしれませんが、いろんなデータを捉えるときのスタンスであります。データによるとこの地域は高齢者率が高く、空き家率も高い状況にあります。活性化するには、非常に重い課題を背負っているように見えるのですが、この状況をマイナスと捉えるのではなく、この地域を活性化するにはどうすればいいのかとプラスに捉えて、強みに変えていくという発想が重要だと思います。高齢者が多いということは、その方たちの経験と知恵をどのように活用していくか。空き家が多いということは、活用の余地が十分にあるということです。また空き地があるということは、新しい建物や仕掛けをつくり出す機会が到来したと捉えるべきであると思いました。

それからエリア特性である京都駅に近いという利便性をどのように生かしていくかは、非常に大事であると思っております。国内外の観光客やビジネスをする人たちが、駅に近いという優位性を感じて足を踏み入れてくれる動きにつながる仕掛けを考えればいいのではないかと思います。

3つ目として、京都芸大が移転してくるということが、一番のキーワードであり、この地区の活性化のトリガーではないかと考えます。大学生の方、特に芸術を志す学生の方の創造力、若さ、感性をこの地域にどのように取り込んでいくことができるか。それがこの地域の活性化の大きなカギを握っていると思えます。学生の感性は、我々が当たり前と思っている物事に対しても、違う視点や新鮮な視点で新しい魅力を引き出してくれることが期待できるのではないかと思います。最初のところで、課題をプラスに変えると申し上げましたが、高齢者の方も学生さんから見れば、語弊はあるかもしれませんが、芸術作品を生み出す1つのモチーフになりえるかもしれません。そういう意味で、学生さんと高齢者がうまく融合するような仕掛けを考えていければ、これまでとは違った活性化の一面が見えてくるのではないかと思います。

河島委員：

住宅市街地総合整備事業について、特に国費との関係がありますので、どういう制度で、どういう内容の事業なのか、もう少しかみ砕いて簡単に御説明いただければと思います。

三科部長：

住宅市街地総合整備事業を担当しております都市計画局の三科と申します。

資料3の2ページの補足をさせていただきます。河原町通よりも東側のエリアにつきましては、かつては密集市街地と言われるような老朽化した建物がたくさんあり、火災などが発生し、死亡事故が起こるといったことが頻発しておりました。これを踏まえ、国の要綱に基づき補助金を受け、密集市街地を解消するために開始した事業でございます。このエリアの面積は9.43haとなっておりますが、この中で、買収した事業の区域は資料の中で虫食いのような形で示している区域です。全部を買収して再開発をするというのではなく、密集市街地の中でも、特に老朽化が進んでいるところを対象に買収・除却し、そこにお住まいの皆さま方については、河原町通よりも東側のエリアの中で建設したコミュニティ住宅にお入りいただく事業を進めてまいりました。

このような事業を進めるに当たっての大きなポイントは、危険性を除いていくということです。その目的はほぼ達せられているという状況ですが、一方で人口が大きく減少しております。地域の施設整備はほぼ終わっておりますが、残った事業用地がたくさんあり、それが現状では緑地や広場といった計画になっています。

なぜ緑地や広場になっているかと申しますと、国の要綱では、事業化できるメニューが限られており、地域の施設整備が終わった今、残った事業用地は広場や緑地という整備メニューにしているものでございます。京都駅東南部エリアの活性化に向け、未活用の土地がこのような活用でよいのかどうか。当委員会の重要なテーマになるのではないかと考えております。

長上委員長：

国の要綱で定める用途以外で活用しようとする、補助金を返さなくてはいけないという仕組みがあるということですね。ですから緑地・広場でいいのかということと、仮にそれに代わって何かをするのであれば、それが可能かどうかということを考える必要があるということです。

河島委員：

コミュニティ住宅の整備等以外の用途がどのようなものかが焦点になってくると思います。ここに住宅を建てる場合は全く問題なく、補助金の返還はない。しかし、先ほど市長の方からも、文化・芸術を生かしたまちづくりに取り組みたいとの御発言がありましたが、例えば、ここに若いアーティストが活動できるものをつくるという提案をすると、補助金の返還となり、そういう話は困るということになるのか、その点をあらかじめ伺うと助かるのですが。

三科部長：

資料4の8ページの市有地の状況を御覧いただきたいと思います。

紫色の箇所が住宅市街地総合整備事業で買収等をして、残事業として残っている部分です。青い箇所はそれ以外の用途で、従前から市が持っているもので、ここには補助金は入っておりません。この紫の箇所に入っている補助金が概略ですが14億円くらいになっております。ここについては、本来の国の要綱で定める用途内で整備していくのが従前のルールでしたが、もっと大きな視点で京都駅東南部エリアにふさわしいあり方を御議論いただきたいと思います。その中で、我々としても国にできるだけ返還しなくてもすむように考えていきたいと思っており、そのバックボーンの部分について、御協議いただければと思っています。

長上委員長：

今の御発言は、この会議で委員のみなさんからアイデアを出していただいて、できるかどうかを検討するということですね。

河島委員：

委員会としては、「国に返還するのはこういう場合」というようなリストをいただいているわけではないので、それは念頭にある程度置きつつ、このエリア全体としてこういうふうになっていくとよいのではないかというグランドデザインのようなものを描いて、それを提言という形でまとめて御報告すると考えてよいのでしょうか。

長上委員長：

私はそれでよいと思っております。行政のお考えもありませんが、この会議体では、柔軟に議論していき、一方で課題はきちんと認識していきたいと思えます。また、その都度事務局の方から「こういう課題がある」と言っていたら、議論の修正もできると思えます。

小田室長：

市長のほうからも「大胆な発想で御議論いただきたい」との話があったかと思えます。国費の返還という話でしたが、他にも課題がございます。そういった課題との兼ね合いもありますが、ここではそういったことを踏まえながらも、大胆な発想でより良くなるお知恵をいただき、その結果として方針をまとめていただければと思っております。

大庭委員：

京都駅に近い、利便性の高いところに市有地がこれだけあるということですので、国費の返還等もあるかとは思いますが、やはり別の用途での展開を視野に入れながら検討していくことは、非常に重要だと思います。とはいえ、住宅を建てるにしろ、別の用途にするにしろ、それが決まるまでの期間というのは、非常に先の話だと思いますので、その間何もしないのでは、このエリアの活性化にはなかなか繋がらないのではないかと思います。その意味では暫定的な土地利用やトライアルのような使い方等も含め検討していく必要があると思っております。

さらに、このエリアは京都芸大が非常に近いということで、そのうまみを生かせないかという考え方があるかと思うのですが、とはいえ鉄道（JR）のバリアがあります。このバリアをどれだけ解消できているのかというのも、エリアとエリアの繋がりをつくるうえで非常に重要になると思えます。

資料4の5ページで立体交差の改善がされているという記載がありますが、それは主に自動車交通であり、例えば学生や教員の方々がこのエリアに歩いて、あるいは自転車で行き来できる環境ができているのか、あるいは複数の鉄道をまたぐようなアクセシビリティが確保されているのかどうかは、非常に重要になってくると思えます。そうでないならば、逆に京都芸大の東側、鴨川を挟んだエリアの方に魅力があり、競争もあるかと思えますので、そのあたりも踏まえ、考えていく必要があると思えました。

長上委員長：

重要な御指摘だったと思えます。特にアクセスの問題、南北は自動車は行き来していますが、頻繁な人の往来がある状況にはないと思えます。今の御指摘について事務局の方からお考えになっていること等、ありますでしょうか。

小田室長：

JR 線が走っていることでのバリアをどうするかという問題ですが、河原町通に加え、河原町と鴨川の間には須原通という道路があり、そこも車も人も行き来ができるようになっておりますし、鴨川の河川敷もかなりきれいに整備され、散策等も適した形になっております。また鴨川沿いにはひかり公園やわかば公園もありますし、北と南を繋ぐ動線はいくつかございますので、京都芸大ができた後にはそういった動線

を使って行き来していただければと思います。また、この委員会として現地を見ていただくことで、そのあたりの確認をしていただければと考えております。

加須屋委員：

京都芸大といたしましても、移転予定地周辺地域ということで、活性化に期待をもっております。私自身、都市計画についての知識はありませんが、若手芸術家の支援に対して、ここは非常にポテンシャルの高い地域ではないかと思っております。学生もそうですが、特に卒業後5～10年の学生にとって、制作や発表の場所の確保は非常に重要です。京都市でも東山アーティスト・プレイスメント・サービスがあり、空き家の活用等、非常に効果が上がっていることは、卒業生からも話が出ております。将来的にも、何かを実現する前の段階でも、空き地あるいは空き家の活用の1つの例として、一時的な発表の場、あるいはアトリエとして期間を区切って使うことができれば、大きなメリットになると考えられます。去年、パラソフィアという国際現代芸術祭があり、その際、崇仁の空き地を活用した非常に魅力的な活動が繰り広げられ、大変集客も多かったと聞いております。京都芸大の移転先である崇仁地域の小学校などは、継続的に活用させていただいており、定期的なワークショップ等の活動を行っているところですので、その流れの一環として、こちらの地域での小学校への展開も考えられるのではないのでしょうか。それは京都芸大だけではなく、京都市内にたくさんある芸術大学とも連携しながら、何か活動を一緒になってやっていくことが、どちらにとってもメリットになると考えております。

西村委員：

私は山王学区には少し遠い地域になりますが、南区に住んで13年くらいになります。子育て支援の団体に所属しておりまして、昨年と一昨年、南区の商店とお子さん連れの家族を地域の人と顔見知りになってもらうために、山王小学校をお借りし、子育てのイベントをさせていただいたことがあり、そういう御縁から今回応募させていただきました。先ほど加須屋先生からお話のあった崇仁小学校での展示も見せていただき、南区でも同じようなことはできるのではないかというのを感じています。

藤岡委員：

なぜこの地域の人口がこれだけ減ったのか、御存じでしょうか。

昔は高瀬川から東はほとんど空き地であったのが、終戦当時、廃品回収業者が集まるようになり、火事が頻発して、働いていた人が何人も死んでいきました。そこで私達の先輩方が、この劣悪な環境を何とかしたいと運動を始めました。市営住宅を建ててもらうために、私も先輩たちと一緒に関わってきました。火事が起きたところから買収していったわけですが、なかなか用地買収は進みませんでした。緑地や公園の整備ならば国の補助を受けられる、ということで事業変更してきたのが、資料4の8ページの図になります。

事業により市営住宅を建ててもらいましたが、若い人の給料が高ければ、家賃が高くなりますから、親子では住めません。若い人たちは、それだけの家賃を無理をして出すのであれば、他の地域に出て行かざるをえない、そういう状況にあったわけです。

この青い部分を民間に売り、建売住宅を建ててもらえば、今まで外に出て行った若い人がとどまってくれるのではないかと思います。山王学区の周辺に建売住宅が建ち、若い人たちが出て行ってしまったのは、中に住めない状況があるからです。残っているのは年寄りばかりなので、人口が減り、高齢化するのは当たり前です。こうした事業が始まってから人口は半分以下になっています。

先ほど国に補助金を返還しなくてもいいと言われていた箇所（北河原市営住宅跡地）は、新幹線を通す

ために、下京に住んでいた人を移した場所です。その後、他の改良住宅が建て替わっていくなかで、(北河原市営住宅の住民が)皆と一緒に地域として付き合いができるのなら、東九条地区内で建て替えることを認めた経過があります(東岩本市営住宅)。

そういう歴史があるところに京都芸大が来る。時代が変わって、きれいなものが来るのは結構ですが、それまでここに住んでいた者が、どんな思いで暮らしてきたのか、考慮してもらいたいと思っています。きれいになるのなら何でもよい、という話にはならないと思います。京都芸大の若い人が来たからと言って、人口が増えるわけではありません。

私も自治連で長い間、活動しておりますが、地域として「なるほど良い地域になったな」と言えるよう、空き地を活用してもらいたいと思っています。けれども、きれいにするだけでなく、どのようにすれば人に戻ってもらえるのが課題であり、昼だけ来てもらって、夜になると人がいない、というまちでは危ないだけです。最近ではゲストハウスがあちらこちらにできていて、夜間の騒音に対する苦情が後を絶たない状況です。

三科部長：

今、藤岡委員から御指摘がありましたように、安全なまちをつくるために取り組んでまいりました事業ではありますが、その弊害も起こりました。こういった弊害は他の地域での住宅地区改良事業でも同じような現象が起こっております。不良住宅を買収し、改良住宅を建てて入居していただく過程のなかで、地区外移転をされ、ずいぶん人口が減少してきているということが起こっております。その顕著な事例が、この東九条地区の案件であるというのは事実でございますし、今後こういったことに、次の施策としてどう対応していくのか、高所大所から御意見をいただければと思っております。

辻局長：

今回は一回目ということで、東九条地区の歴史等について十分に説明ができていなかったというところがございます。我々も活性化の視点だけではなく、ここに住んでおられる方が豊かに暮らしていただくための提言もいただきたいと認識しております。藤岡会長に地元の代表として入っていただいているのも、そういう趣旨を持っているところでございます。

次回までになります。京都駅東南部エリアの実態等を見ていただくため、委員の皆さま方に現地調査をしていただけないかと、事務局としても考えております。そういった機会も踏まえ、我々の方からしっかりと実態等も説明をさせていただきたいと考えております。

長上委員長：

人口構成をみると、本当にどうなるのかという地区もありますので、住んでいる人が定住して、しっかりとまちを支えていくということがない限り、まちづくりにはなりませんので、そのあたりを肝に銘じてしっかりと認識してまいりたいと思います。

第一の議題は対象エリアであったのですが、大庭委員からは周辺エリアを含めて検討してはどうかという意見も賜りましたが、いかがでしょうか。

大庭委員：

補足説明をさせていただきます。このエリアを中心に検討すること自体は結構かと思うのですが、京都駅とのアクセス性や、京都芸大との関係性、あるいはそれ以外のエリアとの関係性を踏まえて検討することが重要ではないかという、そういう趣旨でございます。

長上委員長：

では今の御発言を踏まえまして、山王学区の竹田街道より東側の7ヶ町というのが、事務局の提案ですが、委員会としてもこのエリアを対象エリアとするということで確認させていただきます。そのエリアにおける市営住宅の歴史等、地区の歴史については私たちももう一度、しっかりと認識したいと思います。

②京都駅東南部エリア活性化に向けた議論の視点

資料5の説明ののち、意見交換

小西池委員：

今御説明いただいた内容について、全体的には違和感はございません。

こういう検討をする際のスタンスとして、事務局に確認をしておきたいのですが、この特定の地域のまちづくりの方向性は、京都市全体のまちづくりの考え方やコンセプトとどのような関係になるのか、整合性や全体最適か部分最適かといった話もあるかと思いますが、そのあたりの御見解はどうなのでしょう。さらに、周辺エリアとの連携を図り相乗効果云々とありますが、京都の西の地域の検討もされていますし、さらに京都のもっと南の検討もされていますが、具体的に連携のイメージを持っておられるのか、相乗効果という言葉は非常に美しいですが、どのようになればいいのかについて、今一度確認しておきたいと思いました。

小田室長：

京都市政の基本計画となる「はばたけ未来へ！京プラン」というものがございます。この中にいくつか重点戦略を設けており、その中の1つに「個性と活力あふれるまちづくり戦略」を掲げております。ここで言うのは、京都市は1つの市域ではありますが、それぞれの地域が培ってきた歴史的な建造物や庭園、伝統行事や景観といった資源もありますし、先ほど藤岡会長がおっしゃいました地域に固有の歴史もあります。そういったものを活用して、その地域に応じた活性化のまちづくりをしていくというものです。この3月には、これから5年を計画期間とした、同プラン実施計画の第2ステージを策定したところですが、その重点プロジェクトの中に、京都駅東部エリアの取組や、京都駅西部エリアの取組とともに、この京都駅東南部エリアの活性化方針の策定も位置づけられております。

周辺地域との連携については、京都駅周辺と言いましても、京都駅東南部エリア、西部エリア、東部エリア、それぞれのまちづくりを手掛けているわけですが、土地の資源も歴史も違うなかで、まずは、それぞれの地域特性に応じた取組を行ったうえで、物理的に隣接しているような状況や、京都芸大移転の波及効果等を踏まえ、どのように連携していくのが良いのか検討していきたいと考えております。

大庭委員：

まちづくりの方向性については同感です。特に1番目については、先ほど藤岡委員からお話がありましたように、これまでは時代背景、あるいは京都市の施策に翻弄されてきた部分があるのではないかと思います。今後はこのエリアが、自らエリアの価値をつくり、マネジメントしていくうえで、京都市の施策をどう生かせるかという視点で考えていく必要があると思います。そういう意味では、エリアの住民の方々、事業者の方々が課題をどれだけ十分認識し、かつ何を求めているのかという情報を、この委員会の場や京都市に常に発信していただくということが重要だと思いました。

また、4点目の「民間の知恵と活力を最大限に活用する」とありますが、これまでなぜ民間の活力を活用できなかったのかということ、よくよく考えねばなりませんし、その課題を解消するために京都市の施策が必要なのか、7ページに参考事例が書かれていますが、こういう施策にプラスして何か新たな施策

や、民間を呼び込む施策が必要だと思っておりますので、その点を十分に議論する必要があるのではないかと感じました。

加須屋委員：

私も同感で、京都市全体の施策との関係も重要ですが、一方でこのエリアの歴史的な背景を踏まえた特性、この地域ならではのまちづくりの方向性を十分に反映させる必要があると思います。

この資料のまちづくりの方向性について、例えば「多文化の共生」という視点であるとか、「高瀬川や鴨川が流れている川を中心とした四季折々の風情を生かす」といった、この地域でこそできるような視点を入れた方がよいのではないかと考えます。それは地域のポテンシャルや課題についても同様で、協議が進んでいく過程で抜けないようにする必要があるように感じます。

西村委員：

先ほど藤岡委員から「昼間だけ来ても」というお話がありましたが、定住・移住していただけるような環境づくり、空いている空き家等を活用して、若い方々が芸術活動もしつつ、そこで暮らしていけるような仕組みを考えられないかと思っております。京都市にもモデルプロジェクト等、いろんな施策がありますので、こちらからも提案できるよう、勉強していきたいと思っております。

長上委員長：

今までまちづくりについては、御苦労されてきたことがあると思っております。決して放っておかれたわけではなく、地域の人も、行政の方も、ここのエリアでまちづくりをどう進めようかということで、いろんなことをされてきたのですが、現実には今、藤岡委員がおっしゃったようにうまくいっていないところがあるのだと思っております。そのあたり、何がうまくいっていないのか、なぜ人口が減り続けていて、歯止めがかけられないのか、そのあたりを検証していかないと、あれやこれやアイデアを出しても、結局何も実らないということになるのではないかと考えます。私たちが立ち返るところは地域であり、そこに暮らしがあるわけですから、そこを大事にしていけないといけないと思っております。

藤岡委員：

私自身、旧同和地区で生まれて、学校に上がる時にここにきて、同級生に韓国人や朝鮮人の人たちがたくさんいる中で育ってききましたので、差別をされることがどれだけ腹立たしい、辛いことか知っているから、そんなことはするまいとずっと思っていたのですが、何かの折に、「それは違う。」と、差別をしているような感覚で捉えられることも多くありました。どのような状況になれば、多文化共生が実現している、と言えるのかを理解することは非常に難しいと思っております。

長上委員長：

多文化と言うときれいな言葉ですが、いったいその中身はなんだという問題提起でもありましたし、歴史的な地域の特性をしっかりと踏まえたいので、言葉を使わないといけないと思っております。

河島委員：

皆さんがおっしゃってきたことにおおむね賛成です。

京都芸大移転の話は、大変大きなポテンシャルだと思います。芸術文化政策の領域が私の研究の専門なので、京都市の芸術文化政策に関する委員会にも入ってしまっていて、京都が文化を1つの基軸としたまちづくりをしていくという提案を他の場でもつくっている点から、ここに関しましてもぜひそういう視点を強く打ち出していただけるとありがたいと思っております。

京都芸大が移転されるということで、若い人がたくさん来るという期待もあると思っておりますが、学生は理

由がなければここにも来てくれないでしょうし、どれだけ下宿生がいるのか、御存知でしたらお教え願いたいと思います。学生数は全部で1000人くらいで、この中でどれだけ下宿生がいるのか全くわからないということと、特に音楽関係はピアノなどは家にないとそもそも無理なのではとも思います。むしろ現役
の学生よりも、先生自身が芸術家ですし、先ほど加須屋委員から御指摘があったように、卒業した芸術家
が活躍する場が必要です、その人たちが制作したり発表の場が東九条地区に生まれると、そこに学生を
巻き込む形ができて初めて、北から南への人口の移動が起き、活性化していくと思います。したがって、
学生と大学というのは、1つの起爆剤として期待できますが、あまりそこだけに過度に期待しても気の毒
で、むしろ教員と芸術家という視点を持っておいた方が良いのではないかと思います。

加須屋委員：

私も数字的にはわからないのですが、聞いておりますところでは、京都市内よりも、近畿圏含めて市外
から来た学生の方が多いとのこと。現在では大学が桂にありますので、移転した後、この周辺で下宿
を探すことになるのだらうと思います。それに伴って、食べ物屋等、学生が集まりたくなるような店もで
きるのでは、と非常に期待しています。

音楽関係は確かに防音設備がないと自宅では練習できないので、それは今、市の方に大学の中でレッス
ン室として確保してほしいという要望を出しております。音や匂いなど、たくさんの方々が住んでおられ
る所に移転するに当たっての課題を今検討しているところです。また卒業した後の暮らしと言いますか、
制作の場所と住まい、さらには生計を立てるために雑貨店等を出したりといったことを、京都市内のあち
こちで卒業生たちがやっています。また、自主的に数人でシェアをしてスタジオを借りるといったことも、
ずいぶん聞いております。

小西池委員：

エリアの将来像の4つ目の京都駅からの近接性を生かすというところで、ここでは観光客がベースにな
っていますが、京都駅に近接し移動しやすい面もありますので、若者の小規模なものづくりを支援する意
味でも、若者が気軽に起業ができるような支援など、ビジネスの視点を入れてもいいのではないかと思
います。

大庭委員：

これまでの話を聞いて、やはり実行可能な施策をきちんとつくるということに加えて、手続面、すな
わち、どのように進めていくのかということについても検討した方がよいと思います。それからこのエリ
アの既存住民の方々は、子の世代、孫の世代など、身近な人たちの生活シーンを思い描けるような環境を
求めている部分もあると思いますので、そういうことを踏まえながらの将来像、多文化等々、考えていく
必要があるのではないかと思います。

長上委員長：

様々な御意見をいただきました。課題のところでは、エリアの特性として、アクセスの問題もきちんと
どこかに入れ込む必要があると思います。それから京都芸大は1つの大きな起爆剤ということなので、ど
うしてもそこに目が行きがちですが、それだけに頼っていてもいけませんので、ポテンシャルとしては重
要だけれども、京都芸大の移転と本エリアのまちづくりはどのように関わらせるのかは、少し慎重に議論
をしていきたいと思います。

また、まちづくりの方向性で、エリアの歴史的特性や地域の方々の思いを十分大事にするということも、
どこかできちんと位置付ける必要があると思います。地域と遊離しないという意味でも重要だと思いまし

た。

エリアの将来像につきましては、今までも将来像は出されているのですが、その関連で改めて、少し過去のものも引き出しながら精査をしていく必要があると思います。

さらに、短期で実行可能なもの、先ほどから指摘のありました補助金が絡んでいる所などは、時間がかかるということでしたので、手続と時間の問題を考えながら、いつまでに何をするかまでは立てられないかもしれませんが、手続的なことも視野に入れながら、論議していきたいと思います。まずは実行可能なところは十分議論していただいて、長期的な案件については、この辺りまでという議論ができればと思っています。

③京都駅東南部エリア活性化方針のイメージ

資料6の説明

長上委員長：

皆さんの御意見を踏まえ、エリアの課題とポテンシャルの認識をしっかりと共有したうえで、歴史的な教訓も踏まえ、まちづくりの方向性や将来像を議論していきたいと思います。

④今後のスケジュール説明

資料7の説明

以上